



感染症とたたかう

第21号

2017年
8月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

乳児の多くがかかる **突発性発疹** 「発熱」と「発疹」が2大症状



熱が下がってから赤い発疹が現れる けいれんを起こすことも

突発性発疹は、発熱と発疹を伴う病気で、ウイルスによる感染症です。90%以上が2歳前までに発症し、特に生後6～18カ月までにかかることが多い病気です。生まれたばかりの赤ちゃんは、母親から胎盤を介してもらってきた抗体を持っているので、突発性発疹を発症することは滅多にありません。しかし、生後5カ月くらいまでにその抗体が少しずつ減っていくため、6カ月以降からかかりやすくなります。ただ、ウイルスに感染しても症状が現れない「不顕性感染」もあります。

突発性発疹の症状は、まず何の前触れもなく38℃以上の高熱が出ることから始まります。38～40℃の熱にもかかわらず、本人の機嫌はそんなに悪くなく、咳や鼻水などの風邪のような症状もほとんどみられません。3～4日ほどで熱が治まってきたころに、胸やお腹、背中を中心に赤く小さい発疹が現れ、1日ほどで顔や手足に発疹が広がります。この発熱と発疹が突発性発疹の特徴です。

そのほかにも、下痢やまぶたの腫れ、リンパ節の腫れなどの症状が出る場合がありますが、ほとんどは発熱と発疹だけで、数日間で治まります。ただ、高い熱にともなって「けいれん(ひきつけ)」を起こすことがありますので、その場合は直ちに



小児科を受診してください。

突発性発疹の初期の症状は発熱だけなので、この時期に小児科を受診しても診断することは難しく、数日後に発疹が出て、初めて突発性発疹と診断が確定することがほとんどです。ただし、38℃以上の高熱が出た場合には、ほかの病気の可能性もあるので、小児科を受診しましょう。

潜伏期間はおおよそ10日間 感染経路は解明されておらず

突発性発疹は、1910年に初めて見つかった病気です。以来、長い間、原因が不明でしたが、88年に「HHV-6（ヒトヘルペスウイルス6型）」が、原因ウイルスの一つであることが証明されました。また、HHV-6ではない原因不明の突発性発疹があることも明らかになりました。その後、94年に「HHV-7（ヒトヘルペスウイルス7型）」によっても突発性発疹を発症することが報告されました。潜伏期間はおおよそ10日間と考えられています。

突発性発疹には2回かかることがあります。例えば最初の発症がHHV-6によるものだと、HHV-6の抗体が体の中にできるので、それ以降はHHV-6による突発性発疹にはなりません。し

かし、HHV-7に対する抗体はないため、これにかかると二度目の突発性発疹を発症することがあるのです。

現在のところ、感染経路は十分に解明されていません。突発性発疹にかかった子どもの唾液の中から、HHV-6やHHV-7が見つかることがあります。また子どもの頃に感染した大人の唾液の中にも、体内に潜んでいたウイルスが時々ひょっこり出て来ることもあります。こうした唾液中のウイルスに「しぶき」を介して飛沫感染したり、汚染されたものに手を触れたり直接飲んだり食べたりして感染することも考えられます。

治療は症状を和らげる対症療法 発熱と下痢による脱水には注意を

突発性発疹にはワクチンも特効薬もありません。ただ重症になることはあまりないため、小児科で診断がついても、子どもの機嫌がよければ、特別な治療を行う必要はなく、赤ちゃんが発熱したときの一般的な対処法を行います。

注意が必要なのは発熱や下痢による脱水です。母乳やミルクをしっかり飲んでいれば、あまり心配ありませんが、十分に飲めていない場合は、ミルクや水など子どもが嫌がらない水分を少量ずつこまめに補給してください。

なお、突発性発疹でけいれんを起こすこともあります。ほとんどはすぐに治まり、問題となることはありませんが、嘔吐をとまなう、けいれんを繰り返す、意識のもどりがよくない、ぐったりして元気がないなどの症状があるときは、すぐに小児科を受診してください。

次号（2017年9月号）では「帯状疱疹」を取り上げます。